

社会福祉協議会会長賞

堺市立 野田中学校 二年

福島 遥海

いじめについて私が経験したこと

「社会を明るくする運動」という作文のテーマを見たとき、すぐに私の脳裏をよぎったのは「いじめ」についてだった。というのも、私が数年前に体験したいじめが、今でも頭に焼きついているからである。いじめとは、人に対して特定の関係性をもつ他の児童生徒が行う、心理的または物理的な影響を与える行為である。私自身がいじめについてフラッシュバックした原因は学校環境の変化についてのことだった。

私が小学校高学年だった時、いつも仲良さげな二人組と私で偶然にも同じトイレ掃除の役割りを任された。その二人とは私も面識があり、学校行事などに三人で参加することもあったぐらいで、あまり明るくて開放的な性格でなかった私は顔なじみのある人と掃除ができることにとても安心していった。

ところが、共に掃除をして何週間か経つと、その二人組と私の間に線がひかれ始めた。はじめは二人が掃除の合間に関係のない話をする程度だったが、内容がだんだんエスカレートしていき、掃除をせずずっと二人で話していたり、しまいには掃除を全て私

に任せ、出来具合に文句をつけるようになっていった。最初はそんな二人に怒りを覚えた私だったが、次第にそのような生活が進むにつれ、これまでの親密な関係が打ち砕かれた気がして胸が締め付けられるようになった。今思えばこんなことなど早く親に相談すべきだと思ったが、「心配かけたくない」、「怒られるかもしれない」、当時の私はそんな言葉が頭の中をさまよっていて、なかなか話しかける勇気がでなかった。

それからだろうか、だんだん私の心はおかしくなっていた。寝床について眠ろうとしたとき、突然涙があふれだしたり、大好きなお絵描きもあまりする気がおきなくなっていくた。

そんな時私の心を動かしたのは学校で配られた「サポートセンタ―」のカードだった。今までは興味がなくすぐに捨てていたカード。だが悩んでいる今、「二人で悩まないで」という言葉を見た時、心がぶわっと大きく揺れた気がした。

その夜、一人リビングに降りて母の姿が確認できたときに、私は決心した。これまでの出来事を母に話すことを。精一杯の勇気

をだして母に言った。怒られるかと思ったが、そんなことはなかった。私が話しているとき、相槌をうってくれたり優しい言葉をかけたりしてくれた。「先生に言つたる。まかしとき。」母がそう言つた時とき、私は耐えきれずに泣き崩れてしまった。うれしかったし、なにより本当にありがたかった。その夜はなぜかいつもより安心して眠れた気がした。翌日には先生とこれまでのことについて話し合い、二人組からも謝られた。心に空いた穴は謝られただけでは修復できないが、その言葉で少し傷がいた気がした。

これまでの当時の出来事から思うに、「いじめ」という言葉がすぐに脳裏をよぎつたのは、そのことが強く頭に残つてあつたからだと感じた。当時のことを思い出して書いている私も、今もう一度いじめについて考えてみた。

一番思うのは、悩んでいることを信頼できる人に相談すること。友達、親、だれでもいい。近くに相談できる人がいなければ、サポートセンターなどに電話したつていい。一人で抱え込んでいてもいいことはないし、私もそうだった。もし母に話していなければどうなつていたかわからない。悩みを吐きだせる場を作ることとはとても大切なことだと思う。そして、嫌なことや不快なことを言われたりした人の心の傷は、人によっては一生消えない傷になることもある。自分が絶対に加害者側にならないように、何気ない日々の言動や行動に注意することが大切だと思つたし、これか

ら社会をよりよく、明るくしていくためには、自分を追い込みすぎないことや、心の逃げ場を作つてあげることが重要だと感じた。

今のあなたの心はどうですか。悩みを抱えていませんか。時には自分に思いきり甘えることも必要です。無理をせず、自分を大切にしてください。

